広島経済大学研究論集
第27巻第2号　2004年9月

中国語を母語とする日本語学習者の文法知識が敬語習得に及ぼす影響

宮　岡　弥　生*
玉　岡　賀津雄**
毋　　育　新***

要旨：中国語を母語とする日本語学習者の日本語能力と敬語の知識の関係を検証するために，119名の中国語を母語とする日本語学習者に対して，日本語能力テストと敬語テストを行った。分析の結果，両者に非常に高い相関が見られた。さらに，文法と敬語の因果関係を調べるために，パス解析を行ったところ，次の3つの因果関係が明らかになった。第1に，尊敬表現能力の習得には，助詞および非活用語の習得が直接影響しており，助詞のなかでは特に助詞と副助詞が影響していた。また，活用語の習得は助詞の習得を介して尊敬表現能力の習得に間接的な影響を示した。第2に，謙譲表現能力の習得には，助詞の習得が直接影響しており，特に接続助詞と副助詞の影響が強かった。非活用語および活用語は助詞の習得を介して間接的に影響していた。第3に，非活用語と活用語の習得には相互の因果関係は見られなかった。

キーワード：尊敬と謙譲，文法知識，中国語系日本語学習者，パス解析，助詞

Influence of grammatical knowledge among native Chinese speakers learning Japanese on their acquisition of honorific expressions

MIYAOKA Yayoi (Hiroshima University of Economics)
TAMAOKA Katsuo (Hiroshima University)
WU Yuxin (Xi'an International Studies University)

Abstract: A Japanese grammar test and a honorific (exalted and humble) expression test were administered to 119 Chinese students leaning the

* 広島経済大学経済学部講師
** 広島大学留学生センター教授
*** 西安外国語大学専任講師

Japanese language. The correlation between the overall scores of these two tests was very high. Thus, causal relations between Japanese ability and honorific expression ability were examined by path analyses. We found the following four causal relations. First, knowledge of particles and words with no inflections directly influenced acquisition of exalted expressions. Second, only knowledge of particles affected acquisition of humble expressions. Words with and without inflections had indirect effects via particles to humble expressions. Third, there was no causal relation between words with or without inflections.

Keywords: grammar knowledge, exalted and humble terms, native Chinese speakers learning Japanese, path analysis

1. はじめに

敬語の習得は，外国人日本語学習者にとって難しいと言われている。それは，文法事項を理解し記憶するだけでなく，話し手が，聞き手や話題の人物と自分との人間関係を把握しながらさまざまに使い分けなくてはならない（宮岡・玉岡・浮田，1999；宮岡・玉岡，2000；杉戸，2001；陣内，2001）からであろう。例えば，「あなた（田中先輩）が先生をご案内してくださったんですか。」という文（菊地，1997）を例に取って考えてみる。この文では，補語である「先生」が謙譲語「ご案内する」によって高められているのはもちろんだが，同時に，主語である「あなた(田中先輩)」も尊敬語「くださる」によって高められている（菊地，1997)。また，「部長が私の代わりに社長のお宅へ伺ってくださいました。」という文では，謙譲語「伺う」によって「社長」が高められていると同時に，尊敬語「くださる」によって「部長」が高められ，さらに丁寧語「ます」が聞き手に対する丁寧さを表している。この例では，これら三種類の敬語表現が一つの文章に，同時に使われている。このとき，話し手には各動詞の尊敬語と謙譲語，さらに丁寧語に関する正確な文法知識が要求されるとともに，人間関係を適切に把握して敬語を選択することが求められる。このように，敬語の習得には，適切な人間関係の把握と適切な文法事項の選択という2つの側面があり，外国人日本語学習者の敬語習得を難しくしている。

敬語の習得を人間関係と文法事項の2つの観点から捉えて中国語系日本語学習者を対象に行った調査（Miyaoka & Tamaoka, 2001; Miyaoka, Tamaoka & Wu, 2003）では，文法事項の習得の度合いをみる項目の得点の方が，人間関係の把握の理解をみる項目の得点よりも有意に低かった。この研究は超上級日本語学習者のみを対象としたものであったが，この結果から判断すると，文法事項の詳細な内容

が中国語系日本語学習者に思ったほど習得されていないのではないか思われる。

また，滝浦（2001）は，敬語選択において上向きと下向きと共に，ウチ向きとソト向きがあることを指摘している。ウチとソトに関連した敬語に「身内敬語」があるが，これは身内である敬語上の一人称の人物を高めてはいけない（菊地，1997）というルールである。例えば，「私の父が先生にそのことを申し上げました。」という文は，「先生」を高めるために，敬語的一人称である「私の父」の動作を表す「言う」の謙譲語「申し上げる」を使った正しい文である。しかし，主語と補語を入れ替えて「先生が私の父にそのことを申し上げました。」となると，「先生」を主語として敬語的一人称である「私の父」を高めることになるので誤りである。この「敬語的一人称」の人物とは，話し手側の領域の人物，つまり身内のこととだが，「他人と話す場合の家族・親族」のような場合ばかりでなく，たとえば「社外の人と話す場合の社内の人物」なども含まれる。例えば，社外の人から「部長さん，いらっしゃいますか。」と尋ねられた秘書が「はい，いらっしゃいます。」などと言っては誤りで，「はい，おります。」と言わなければならない（菊地，1997）。しかし，同じ社内の人から尋ねられた場合には，「はい，いらっしゃいます。」が正しい。このような聞き手や場面による使い分けに「身内敬語」の難しさがある。Miyaoka, Tamaoka & Wu（2003）では，身内敬語の「敬意の対象の原則」を正確に把握するのは，中国語系日本語学習者の日本語能力の上位グループでも難しいという興味深い結果が得られた。たとえ超上級の日本語学習者でも，身内敬語は苦手なようである。

以上のように，敬語には人間関係の把握と文法事項という2つの側面がある。人間の発話行為として敬語の普遍性を追求する研究に，「敬意表現」（井出，2001），「ポライトネス理論」（Brown & Levinson, 1987；Hori, 2004；阪本，2001；宇佐美，1993，2001），「協調理論」（橋元，2001）などがあるが，これらは，敬語の言語学的記述（菊地，1996，1997）のように文法事項に焦点を置くというより，積極的に日本語が使われる状況や現象を解釈する立場を取る。しかし本研究では，これらの敬語表現が行われている状況についての詳細な議論はいったん検討の対象から外して，日本語という言語の構造（敬語とは関係のない一般的な日本語の文法）に関する知識が，尊敬語と謙譲語の敬語習得にどのように影響しているかを考察する。

2．方　　法

2.1　被験者

中国語を母語とする日本語学習者119名に対して，文法と敬語のペーパーテスト

を行った。被験者のうち，82名が女性で，37名が男性であった。年齢は，最も若い被験者が17歳４カ月で，最も年齢の高い被験者が39歳11カ月であった。全体の平均年齢は，23歳３カ月で，標準偏差が４歳３カ月であった。なお，本研究では，台湾出身の中国語母語話者および韓国語を第１言語とする中国人は含まれていない。

2.2　テストの形式

文法テストは50問からなり，この中で助詞に関連した質問が20問，活用語（動詞，形容詞，形容動詞）が20問，助詞以外の非活用語（副詞，連体詞）が10問である。テストは，文の中の（　）に適切な平仮名一文字を入れるという形式で行った。例えば，助詞に関連したものとしては「鳥のように空（　）飛んでみたい。」，活用語（形容詞）は「今朝，頭が痛（　）て，起きようにも起きられなかった。」などである。採点は，１問１点として計算した。

敬語テストの課題は，尊敬語が36問と謙譲語が24問の合計60問である。これらの課題はすべて誤った敬語表現が用いられている文である。この他に，正しい敬語が用いられているダミーの問題の20問を加え，計80問を被験者に提示した。テストの形式は，文中の下線が引かれた表現が正しいと思えば○を書き，正しくないと思えば訂正するというものである。このテストの課題には，文法事項の習得をみる問題と人間関係の把握の理解をみる問題の両方が含まれており，その割合は１：２である。例えば，文法事項の問題は，動詞「乗る」と尊敬表現の「お－になる」の接続の仕方が間違っている「山田先生，駅までタクシーにお乗られになりますか。」の下線部を訂正するというものである。一方，人間関係の把握に関する問題は，敬語的一人称である「私の父」に対して敬語を用いている点で間違っている「私の父は，車を買うことをお決めになりました。」や，尊敬語を用いて待遇するべきである山田先生を丁寧語のみで待遇しているという点で不適切な文である「その写真は，山田先生が撮りました。」などである。

課題文に登場する人物は，被験者，被験者の父，山田教授（男性），佐藤教授（男性）の４人である。これら４人のうち，山田教授と佐藤教授は，人間関係上，被験者が敬語を用いて待遇しなくてはならない人物である。荻野らが大学生を対象に行った調査（荻野・金・梅田・羅・盧，1990）でも，最も丁寧な接し方をするのが「大学の先生」であった。それに対して被験者の父は，被験者が他人に話す場合には敬語を用いて待遇してはならない人物である。つまり，本調査で設定した登場人物は，敬語を用いるもしくは用いないことが敬語使用上の規範から考えて明らかな人物のみである。したがって，敬語を使うかどうかが微妙な対象は，本研究では

扱っていない。

採点は，正しい訂正が2点，不十分な訂正が1点，誤った訂正が0点として計算した。採点の基準は，全課題および全被験者で統一した。なお，敬語を，尊敬，謙譲，丁寧の三分法で捉えるとすれば，丁寧表現も含むべきであるが，丁寧は尊敬および謙譲と一緒に使用されることがほとんどであるため，今回の調査には含まなかった。

3．分析と結果

中国語を母語とする日本語学習者119名について，日本語学習期間，文法テスト，敬語テストの結果から，相関および因果関係を以下の手順で考察する。

3.1　文法と敬語の相関および単回帰分析

文法テストと敬語テストの結果の全体的な傾向を検討するために，50点満点の文法テスト全体と120点満点の敬語テスト全体の得点について，ピアソンの相関係数を算出した。その結果，両者は非常に高い相関（$n=119$，$r=.74$，$p<.01$）を示した。さらに，敬語テストの得点を，文法テストの得点で予測する単回帰分析を行ったところ，$Y=1.86X+3.70$ という回帰方程式が得られた。また，決定係数（また

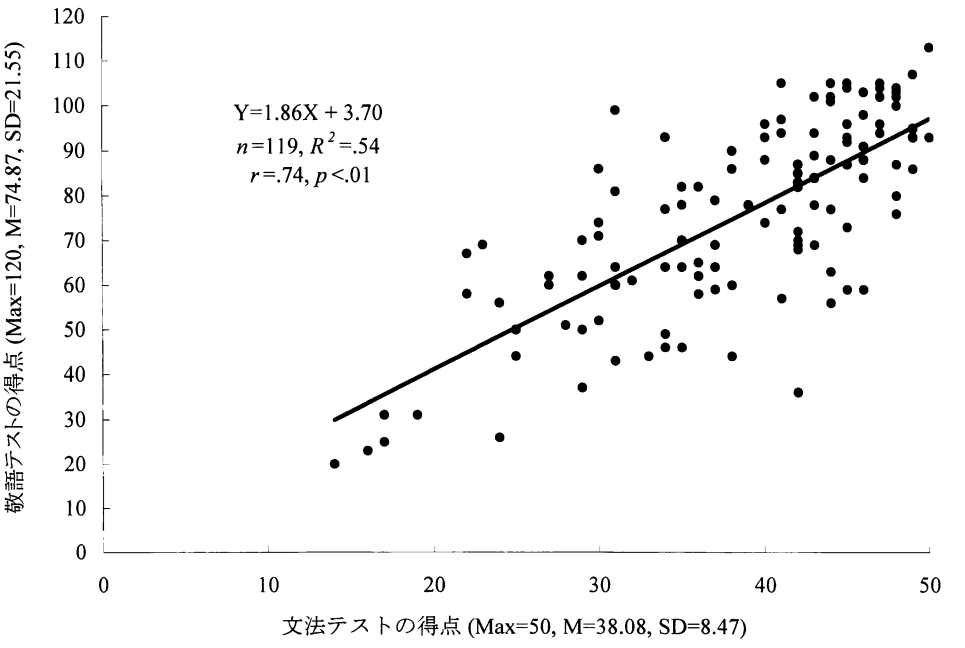

図1　中国語を母語とする日本語学習者の文法および敬語テスト得点のプロッテリング

は寄与率）の R^2 は，.54という高い数値を示した。これは，文法テストの得点だけでも，敬語テストの結果をかなりの程度まで予測できることを示唆している。図1に，両得点のプロッテリングおよび回帰直線を示した。この図から，全体的にみた場合に，文法テストの得点が高いと敬語テストの得点も高くなり，文法能力と敬語能力がお互いに直線的な関係を示していることが分かる。しかし，2つの変数の相関係数や単回帰分析だけでは因果関係を十分に検討することはできない。

3.2　各変数の相関係数

より詳細に変数間の関係を考察するために，まず，すべての変数の相関係数を算出した。その結果，表1のような結果が得られた。敬語をさらに，尊敬表現と謙譲表現とに分けて文法の合計得点との相関を出してみると，文法と尊敬表現の合計得点（r=.62，p<.01）および文法と謙譲表現の合計得点（r=.70，p<.01）は，共に高い相関を示した。また，尊敬表現と謙譲表現の相関もかなり高かった（r=.58，p<.01）。さらに，文法の下位尺度である助詞と活用語の間（r=.80，p<.01），助詞と非活用語の間（r=.74，p<.01），活用語と非活用語の間（r=.68，p<.01）の相関が高かった。これに対して，日本語学習期間を月数で示した変数と，他の変数との相関は全体的に低かった。表1からも分かるように，ほぼすべての変数間の相関係数が有意であるが，それ以上のことは相関の分析からは語れない。つまり，相関係数はあくまで2つの変数間の関係を示すに過ぎないので，より詳細に因果関係を解明するために，パス解析を行った。

3.3　文法事項から尊敬表現能力への影響を検討するパス解析

文法能力から尊敬表現能力への影響を検討するために，パス解析を行った。パス解析には，1パーセント有意を基準としたステップワイズ法による重回帰分析を使った。具体的には，尊敬表現能力，助詞の習得，非活用語の習得，活用語の習得の

表1　文法，尊敬，謙譲，学習期間の変数についての相関，平均および標準偏差

変数名	満点	1	2	3	4	5	6	7
1 尊敬の合計得点	72	—						
2 謙譲の合計得点	48	.58 **	—					
3 文法の合計得点	50	.62 **	.70 **	—				
4 文法－助詞	20	.58 **	.71 **	.96 **	—			
5 文法－活用語	20	.56 **	.60 **	.92 **	.80 **	—		
6 文法－非活用語	10	.58 **	.54 **	.83 **	.74 **	.68 **	—	
平均		47.53	27.34	38.08	13.65	16.30	8.13	42.98
標準偏差		13.48	10.72	8.47	4.45	3.07	1.67	31.68

注：n=119. * p<.05　** p<.01.

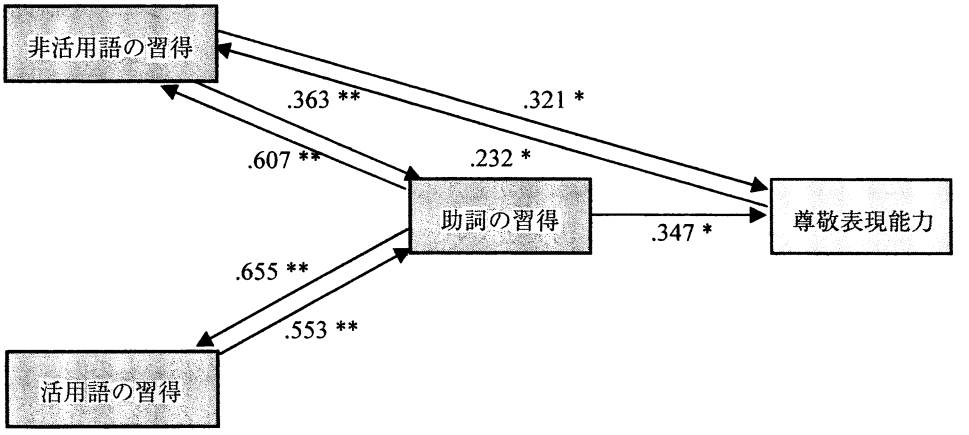

図２　文法項目得点から尊敬表現能力への影響を検討するパス図

注１：パス係数はステップワイズ法による重回帰分析の標準偏回帰係数.
注２：$n=119$，$^{*}p<.01$，$^{**}p<.001$.

４つの変数を順番に目的変数とし，残りを説明変数として，重回帰分析を繰り返した。パス解析の係数には，標準偏回帰係数（β）を使用した。分析の結果をパス図として描いたものが図２である。

分析の結果，助詞の理解が尊敬表現能力に直接影響していることが分かった（$\beta=.347$，$p<.01$）。また，非活用語の習得が尊敬表現能力の向上を促進し（$\beta=.321$，$p<.01$），また逆に尊敬表現能力の向上が，非活用語の習得を促進するという因果関係も示された（$\beta=.232$，$p<.01$）。しかし，活用語の習得と尊敬表現能力との因果関係はまったく見られなかった。さらに，助詞の習得は，非活用語の習得（$\beta=.697$，$p<.001$）および活用語の習得（$\beta=.655$，$p<.001$）に強く影響することが分かった。また，この反対方向の因果関係も証明された。具体的には，非活用語の習得が助詞の習得を促し（$\beta=.363$，$p<.01$），また活用語の習得も助詞の習得を促進する（$\beta=.553$，$p<.001$）。以上のように，尊敬表現能力は，非活用語と助詞の習得からの影響があることが分かった。それに対して，非活用語と活用語との間に因果関係はなかった。この両者の語彙項目の習得が，直接因果関係を持たないのは興味深い。これは，非活用語が語形の記憶のみに依存しているのに対して，活用語は語形の記憶と共に，それが接続する単語によって活用を変えなければならないとう複雑な手続きを必要とするという違いがあるからだと考えられる。

次に，助詞に焦点を絞って考察する。前述のように，助詞の習得が尊敬表現能力に直接影響していることが分かった。そこでさらに，どのような種類の助詞の習得

が尊敬表現能力に影響しているかを，重回帰分析で検討することにした。本研究の助詞習得テストの項目は，国語の学校文法の分類と同じく，副助詞，接続助詞，終助詞，格助詞の4種類に分けられる。この基本となった山田孝雄文法では，係助詞と間投助詞を含んで6種類に分類している（福島，1978）が，本研究では4種類しか含まなかった。もちろん，この分類が必ずしも受け入れられているわけではない（城田，1998）が，本研究では，国文法での一般的な助詞の分類を採用した。それぞれの得点の平均と標準偏差および相関係数は，表2に示した通りである。表2から分かるように，すべての助詞の間に有意に高い相関が見られた。とりわけ，格助詞と副助詞は，相関が非常に高かった（r=.65，p<.01）。相関が高いものの，それぞれの助詞は異なった機能を持っており，尊敬表現能力を予測する重回帰分析において多重共線性（極端に高い相関を持つ変数を2つ以上説明変数として使うと，単相関と偏回帰係数の符号が一致しなくなる現象）は起こらないであろうと思われる（有馬・石村，1999；菅，1999）。

表2　副助詞，接続助詞，終助詞，格助詞の相関，平均および標準偏差

助詞の種類	満点	1	2	3	4
1 副助詞	6	—			
2 接続助詞	5	.49 **	—		
3 終助詞	2	.54 **	.39 **	—	
4 格助詞	6	.65 **	.54 **	.57 **	—
平均		4.45	2.93	1.27	4.19
標準偏差		1.49	1.59	0.76	1.40

注: n=119. * p<.05　** p<.01.

さらに，4種類の助詞から敬語表現能力を予測する重回帰分析を行った。その結果，表3に示したように，もっとも有意な予測変数となったのは，副助詞（β=.279，p<.01）であった。次に有意な予測変数となったのは，終助詞（β=.261，p<.01）であった。格助詞（β=.087，*n.s.*）および接続助詞（β=.024，*n.s.*）は，有意な予測変数とはならなかった。これは，助詞の中でも，副助詞と終助詞の習得が敬語表現の習得に影響していることを示している。本重回帰分析の寄与率（R^2=.303）は，ある程度高い。ただ，本重回帰分析で説明しきれていない部分（寄与率の残りの部分）については，「敬意表現」（井出，2001），「ポライトネス理論」（Brown & Levinson, 1987；阪本，2001；宇佐美，1993, 2001），「協調理論」（橋元，2001）などで議論されているような人間の発話行為としての側面の影響が考えられよう。

表3　尊敬表現能力を4種類の助詞の習得で予測した重回帰分析

説明変数名	偏回帰係数	標準偏回帰係数	F値	
終助詞	4.650	0.261	6.904	**
副助詞	2.530	0.279	6.621	*
格助詞	0.833	0.087	0.572	
接続助詞	0.200	0.024	0.061	

注1: n=119. * p<.05　** p<.01.
注2: 決定係数(R^2)は，.303であった.

3.4　文法事項から謙譲表現能力への影響を検討するパス解析

尊敬表現能力の場合と同様に，文法の下位尺度から謙譲表現能力への因果関係を検討するために，1パーセント有意のステップワイズ法による重回帰分析を，目的変数を入れ換えて繰り返した。その分析の結果は，図3のパス図に示した通りである。重回帰分析で得られた標準偏回帰係数（β）を，図3の因果関係を表す指標として使用した。

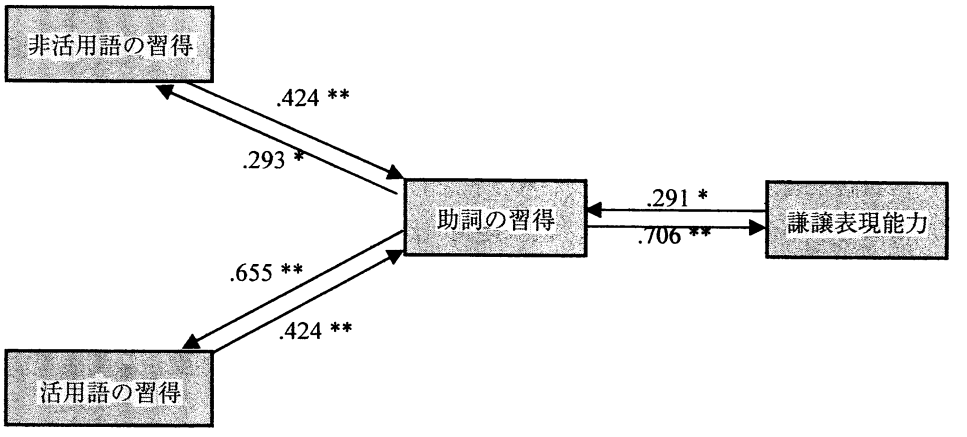

図3　文法項目の得点から謙譲表現能力への影響を検討するパス図

注1：パス係数はステップワイズ法による重回帰分析の標準偏回帰係数.
注2：n=119, *p<.01, **p<.001.

その結果，助詞の習得が謙譲表現能力に対して非常に強い影響を示した（β=.706, p<.001）。つまり，助詞の習得が進んだ中国語系日本語学習者は，謙譲表現能力が強く促進されることを意味している。また，逆に，謙譲表現能力が向上すると，助詞の習得も促進されるという方向の因果関係も，若干ではあるが見られ

た（β=.291，p<.001）。予想に反して，活用語と非活用語から直接，謙譲表現能力に影響するような因果関係はなかった。また，尊敬表現能力と同様に，非活用語と活用語の間の因果関係も見られなかった。また，非活用語および活用語は共に助詞の習得と相互に因果関係を持っていた。特に，活用語の習得は，助詞の習得に直接影響し（β=.424，p<.001），またその逆の影響も強かった（β=.655，p<.001）。以上のように，非活用語と活用語の習得が，助詞の習得と直接の因果関係を持ち，さらに助詞の習得が，謙譲表現能力と直接の因果関係を持つという構図が見られた。

表4　謙譲表現能力を4種類の助詞の習得で予測した重回帰分析

説明変数名	偏回帰係数	標準偏回帰係数	F値	
接続助詞	1.958	0.291	11.807	**
副助詞	2.047	0.284	8.696	**
格助詞	1.528	0.200	3.863	
終助詞	0.490	0.035	0.154	

注1: n=119. * p<.05　** p<.01.
注2: 決定係数(R^2)は，.451であった.

図3のパス解析で明らかになったように，助詞の習得が謙譲表現能力に強く影響していた。さらに，尊敬表現能力の場合と同様に，重回帰分析でどの種類の助詞が特に影響しているかを検討した。副助詞，接続助詞，終助詞，格助詞の4種類の助詞から謙譲表現能力を予測する重回帰分析を行った。その結果，表4に示したように，もっとも有意な予測変数は，接続助詞（β=.291，p<.01）であった。次に有意な予測変数は，副助詞（β=.284，p<.01）であった。格助詞（β=.200，*n.s.*）および終助詞（β=.035，*n.s.*）は，有意な予測変数とはならなかった。寄与率（R^2=.451）は，尊敬表現能力と比べて高く，これらの助詞の知識が謙譲表現能力の習得に強く影響しているといえよう。

4．考　　察

本研究で実施した文法テストと敬語（尊敬表現と謙譲表現）テストの総合点の相関が極めて高かったことから，日本語学習期間，および文法事項と敬語の習得について，パス解析で因果関係を考察した。その結果は，以下の3つに要約できるであろう。

第1に，尊敬表現能力は，非活用語と助詞の習得からの直接の影響があることが分かった。しかし，尊敬表現能力から助詞への直接の影響はなかった。助詞は動詞

によって異なる場合が多く，助詞と動詞を一緒に学習することも多い。一方，敬語は動詞の理解と強いつながりがあり，動詞は助詞とともに使われることが多いことから，動詞を介して敬語と助詞の理解が関係しているのだとも解釈できるだろう。そこで，より詳細に助詞の影響を調べるために，助詞の下位尺度である副助詞，接続助詞，終助詞，格助詞の4種類から尊敬表現能力を予測する重回帰分析を行った。その結果，副助詞と終助詞の習得が敬語表現の習得に影響していることが分かった。副助詞は，いろいろな単語に意味を付加する働きをする。例えば，強調の意味では「次の試合こそがんばる。」，限定の意味では「きみだけに教えるよ。」のように使われ，副詞的な機能をもちながら微妙な意味内容を添付する役割を担っている。また，終助詞も，文や文節の終わりに付いて，話し手の気持ちや態度を表す。例えば，勧誘では「いっしょに行こうか。」や，強調や断定では「彼は野球が大好きさ。」など，やはり微妙な意味内容を付加している。これらは，その場の雰囲気や人間関係を反映しながら微妙な表現を要求する尊敬表現とも類似する知識とも言えよう。

第2に，文法能力から謙譲表現能力への影響は，かなり分かりやすい関係であった。非活用語と活用語の習得が別々に助詞の習得と直接の因果関係を持ち，さらに助詞の習得は，謙譲表現能力と直接の因果関係を持つという構図であった。尊敬表現能力を予測する重回帰分析の結果，接続助詞と副助詞が有意な謙譲表現能力を予測する変数となった。接続助詞は，用言や助動詞について前後をつなぎ，その関係を示す役割を持つ。例えば，確定の逆説では「寒いけど行く。」や，仮定の順接では「雨が降ると中止だ。」など，やはり微妙な意味内容をつないでいる。また，副助詞も副詞的な機能で，強調，類推，限定などの意味を加える。謙譲表現が中国語系の超上級の日本語学習者でも難しいとされて（Miyaoka & Tamaoka, 2001）いるのは，こうした接続助詞や副助詞などの微妙な表現の習得と関係があるのであろう。

第3に，活用語と非活用語の習得の間には因果関係はないが，双方が助詞の習得と相互に因果関係があった。やはり，語彙が変化するか否かにかかわらず，助詞の理解は語彙の習得と強く関連していた。日本語の文法を教えるにあたり，助詞の習得が重要であることが分かった。この結果は，日本語学習者にとって助詞は敬語と並んで最も習得が難しいとされている（辻村，1989）従来の指摘と重なるものであろう。助詞は，複数の意味や用法をもつものが多い上に，それがなくてもある程度の意味伝達が可能であるために日本語学習者が徹底した習得の必要性を感じないことから，習得が難しいと言われているのだとも考えられる。この点において，敬語と助詞は類似した性格をもつと言えるであろう。

引 用 文 献

有馬　哲・石村貞夫（1999）．*多変量解析のはなし*，東京書籍．

Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage.* Cambridge University Press.

福島邦道（1978）．*国語学要論*，笠間書院．

橋元良明（2001）．配慮と効率－ポライトネス理論とグライスの接点，*言語*，30（12），44–51.

Hori, M. (2004). An analysis of language use in Japan viewed from Brown and Levinson's politeness theory. *Journal of Inquiry and Research* (Kansai Gaidai Univeristy), 79, 149–167.

井出祥子（2001）．国際化社会の中の敬意表現，*日本語学*，20（4），4–13.

陣内正敬（2001）．談話における敬意表現の社会的多様性－「道教え談話」に見られる年齢差・地域差，*国立国語研究所（編）　談話のポライトネス*，123–129，国立国語研究所．

菅　民郎（1999）．*多変量統計分析*，現代数学社．

菊地康人（1996）．*敬語再入門*，丸善ライブラリー．

菊地康人（1997）．*敬語*，講談社学術文庫．

荻野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松（1990）．日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照，*朝鮮学報*，136，1–51.

辻村敏樹（1989）．待遇表現（特に敬語）と日本語教育，*日本語教育*，69，1–10.

宮岡弥生・玉岡賀津雄・浮田三郎（1999）．外国人が用いた待遇表現に対する中国地方在住の日本人の評価，*日本語教育*，103，40–48.

宮岡弥生・玉岡賀津雄（2000）．待遇表現の適切性判断における地域差，世代差および男女差の影響，*読書科学*，172，63–72.

Miyaoka, Y. & Tamaoka, K. (2001). Use of Japanese honorific expressions by native Chinese speakers. *Psychologia*, 44, 209–222.

Miyaoka, Y. & Tamaoka, K., Wu, Y. (2003). Acquisition of Japanese honorific expressions by native Chinese speakers with low, middle and high Japanese abilities. *Hiroshima University of Economics, Journal of Humanities, Social and Natural Sciences* [*広島経済大学研究論集*], 26(2), 1–16.

阪本俊生（2001）．現代の社会関係と敬語の可能性－ブラウンとレヴィンソンのポライトネス論を手がかりに，*言語*，30(12)，34–41.

城田　俊（1998）．文法格と副詞格，*仁田義雄（編）　日本語の格をめぐって*，67–94，くろしお出版．

杉戸清樹（2001）．待遇表現行動の枠組み，*国立国語研究所（編）　談話のポライトネス*，99–109，国立国語研究所．

滝浦真人（2001）．〈敬意〉の綻び－敬語論とポライトネスと「敬意表現」，*言語*，30(12)，26–33.

宇佐美まゆみ（1993）．談話レベルから見た“politeness”：“politeness theory”の普遍理論確立のために，*ことば*，14，20–29.

宇佐美まゆみ（2001）．ポライトネス理論から見た〈敬意表現〉－どこが根本的に異なるか，*言語*，30(12)，18–25.